

所信表明（2001・5・30）

中嶋 嶺雄

このような機会をつくっていただいたことに感謝します。すでに「意思表明文」がありますので、ここではそれ以外の補足をさせていただきます。

まず第一に、いわれるところの学内とくに外国語学部の閉塞状況やディスコミュニケーションについてであります。その責任はひとえに私にあるものと深く反省しております。そこで若干振り返ってみますと、最初のきっかけは、私が学長就任後の概算要求で振替えを伴う博士講座の新設に当たったときであったと思います。夏休みに入った7月下旬に文部省から翌日までに具体的な内容を提示すべく要請があり、急遽、大学院責任者にご相談して対応したのです。ところが秋口になって、意外にも一部の教官から声高に激しい糾弾を受けました。しかし私としましては大学審議会での論議や他大学の出方からして、ここで大学院重点化という大学のプレステージにもつながる措置を逃せば、本学に未来はないと確信して行動したのです。それが「独断専行」「トップ・ダウン」だという今日のご批判につながっていったと思います。最近の部局化への移行や正式な評議会の発足、外国人教師の再配置などにおいても同様であったと思います。責任は私にありますが、学長のリーダーシップの在り方を含めて、建設的な提案を是非お願いいたします。

そこで第二に申し上げたいことは、学長としての私の対外的な役割と学内調整との関係についてであります。私にとっての日常は、国立大学への官僚統制と護送船団方式にこりかたまってきた文部官僚への説得の日々でした。科学技術優先政策のもとで異文化理解や21世紀における「言語」のもつ意味の重要性をなかなか理解していただけなかった文部科学省ですが、最近では本学への理解と協力を大きく得られるようになりました。だが同時に痛感しますことは、予算や人員配置からしてあまりにも貧弱な本学に比しての旧帝大などの巨艦とのたたかいのしんどさであります。私は本学がこれ以上むやみに量的拡大をすべきだとは思っていません。しかし優秀な学生やそれに応える教職員を擁する本学が、さらに質的向上を果たすべき資格は十分に備えていると思うのです。従って、今日の大きな社会的転換期に際して、痛みをともなわず学内が和気藹々としているだけでは、そして学長がそれに乗っかって気持ち良く存在しているだけでは、本学の発展も拡充もあり得ないと信じます。

第三に申し上げたいことは、本学にとっての語学教育の重要性についてであります。社会が本学に求めるものは、また「四大学連合」が本学に期待しているのは外国語運用能力向上のための教育であり、この点こそ本学の誇るべき「売り」であることは信じて疑いません。

最後に申し上げたいことの第一は、学長の三選の問題についてであります。本学にも三選された学長が歴代八名のなかで二人おり、また八年、十年と学長を勤める他の国立大学長も現に存在していますが、たしかに一般論としては学長の任期はできるだけ短い方がよいと思います。また私自身、一人で読書をするスペースさえない学長室や公用車という「オリ」から一日でも早く解放されたいとの思いもあります。いつも心のなかにあるのは、reglements（規則）、lois（法律）、travaux（雑用）、bureaux（オフィス）などからの「解放」を歌った1930年代のフランスの映画、ルネ・クレール監督の「自由を我らに」の歌詞ですが、しかし学長の任期はその大学が直面している課題や将来計画によってこそ左右されるべきものと思います。学長の任期につきましては、本来は粛々と進められるべき学長選挙が実際には選挙戦のようになっている本学の学長選挙の在り方を含めて、次回までには是非再検討していただきたいと思います。

そこで第二に、6年に近い私の学長職を振り返ってみますと、あっという間に時間が過ぎていきました。就任早々から多くの時間を費やさざるを得なかった『東京外国語大学史』の編纂・執筆、一連の百周年記念事業、募金活動、対外交流、独立行政法人化問題、「四大学連合」、そして最大の任務としてのキャンパス移転などのためであります。そして来るべき二年間に予想される重要な諸問題への対応をという点では、あと二年だけは私が学長を継続すべきではないかという重い責任感が、自らに鞭打って私をここに座らせているのだと思います。

最後になりますが、今日の学内のムードからすれば、学長が変われば一時的には閉塞状況が打破され、新風が吹くかもしれません。しかし一方で本学のことを本当に真剣に考えているとは思えない一部の無責任な人々のポピュリズムやオルテガのいう「大衆の反逆」的状况は、しばしば権力志向型の、あえていえばスターリニスト的な党官僚（ロシア語でいうアパラチキ）の統治を導くというわれわれ同時代史の「歴史の教訓」も忘れるわけにはゆきません。

今回の学長選に当たっての私のキーワードは「反省と責任」であります。どうか皆さん、誰が外語の夢を大きく育て、外語の将来を本当に思い、そして外語を愛しているのかを冷静に判断していただきたいと思います。何卒よろしく願いいたします。